

結婚、出産、子育てに関する県民意識調査の 中間報告

- ・結婚、出産、子育てに関する県民意識調査の調査概要
- ・結婚、出産、子育てに関する県民意識調査（第一群）の主な集計結果
- ・子育て世帯意識調査（第二群）の主な集計結果
- ・結婚、出産、子育てに関する高校生意識調査（第三群）の主な集計結果

平成31年2月12日

結婚、出産、子育てに関する県民意識調査

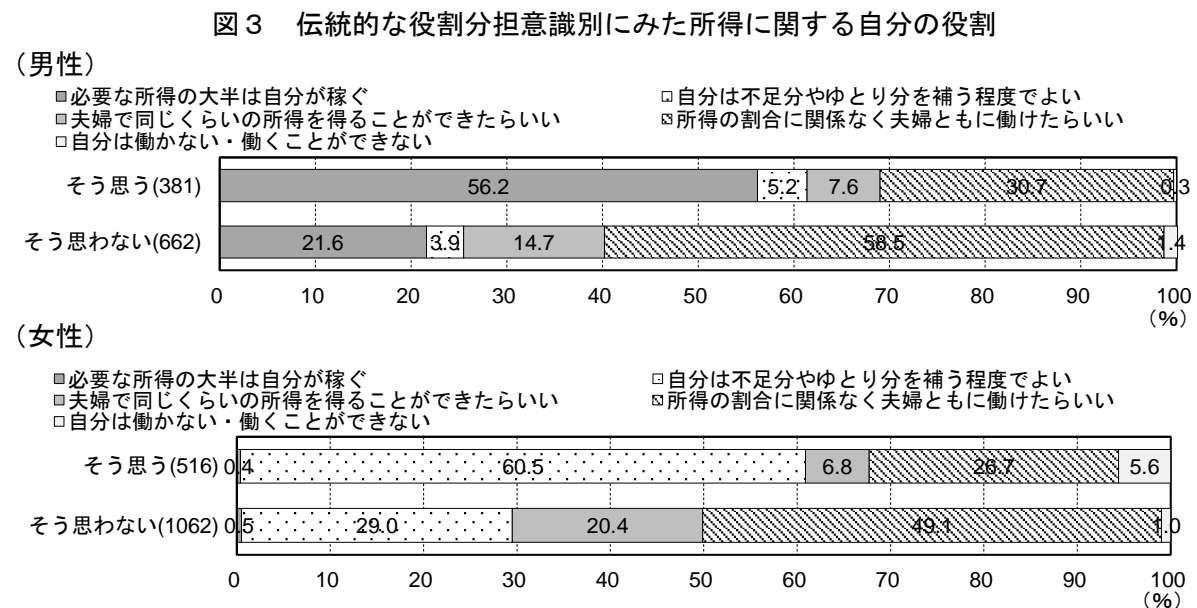
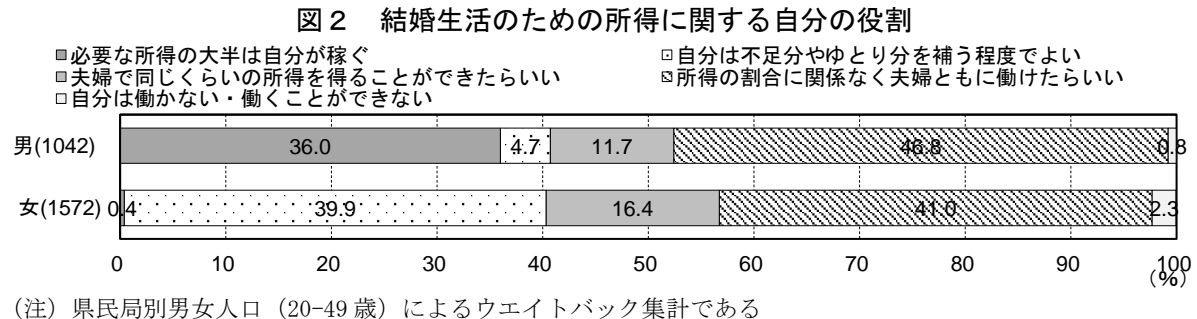
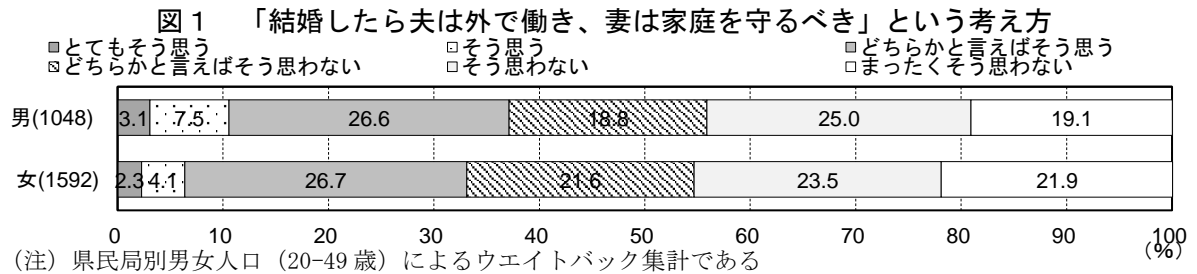
調査概要

項目	第一群調査	第二群調査	第三群調査
①調査名称	結婚、出産、子育てに関する県民意識調査	子育てに関する意識調査（子育て世帯意識調査）	結婚、出産、子育てに関する高校生意識調査
②目的	岡山県内における結婚、妊娠・出産、子育てに関する現状等を把握し、子育て支援施策を推進するための基本的計画である「岡山いきいき子どもプラン2020(仮称)」を策定するための基礎資料とする。		
③対象	<ul style="list-style-type: none"> ・平成30年10月1日時点で20歳から49歳の岡山県内在住者 ・市町村の住民基本台帳から無作為に抽出 	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳から小学校3年生までの子どもと同居する子育て世帯の親等 ・保育園、小学校等のバランスと市町村のバランスに配慮し、学校を抽出 	<ul style="list-style-type: none"> ・岡山県立高校の二年生および三年生 ・県民局ごとに、普通科・職業科のバランスを配慮し、学校を抽出
④調査期間	平成30年9月28日～ 平成30年11月7日	平成30年11月14日～ 平成30年12月7日	平成30年11月1日～ 平成30年11月21日
⑤対象数 (県民局別に基本集計が可能な標本数)	備前局 3085人 備中局 3252人 美作局 3382人 合計 9720人	備前局 2565世帯 備中局 2558世帯 美作局 2511世帯 合計 7634世帯	備前局 961人 備中局 955人 美作局 974人 合計 2890人
⑥調査方法	<ul style="list-style-type: none"> ・郵便送付 ・郵便回収・ウェブ回答 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園・幼稚園・学校等による直接配付 ・郵便回収・ウェブ回答 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校による直接配付 ・高校による直接回収・一部ウェブ回答
⑦回収結果	回収数 2683件 回収率 27.6%	回収数 3391世帯 回収率 44.4%	回収数 2577件 回収率 89.2%
⑧主な調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚意欲、結婚の見通し ・結婚観、家族観、子ども観 ・理想の子ども数 ・現実に持てる子ども数 ・ライフコースの志向性、定住意識 ・交際状況、出会いの機会 ・所得や雇用形態と結婚 ・男女の役割分担意識、ライフ・ワーク・バランス ・結婚・出産・子育てによる働き方の変化 ・職場の結婚・出産・子育てに対する配慮 ・地域社会との関わり ・親との近居、結婚時の移動 ・妊娠・出産に関わる医学的知見の認知 ・妊娠・出産に関わる不安 ・基本属性 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てに対する感じ方 ・子育てをされていて、幸せ、楽しい、よかったと思うこと ・子育てをされていて、つらいと思うこと、自信を失うこと ・子どもを強く叱ったり、つらくあたること ・理想の子ども数 ・現実に持てる子ども数 ・子育ての家計に対する負担 ・子どもの教育の考え方 ・子育ての配偶者の関わり方 ・育児休暇の取得状況 ・平均的な帰宅時間 ・子どもが理由による転居 ・親との同居・近居 ・保育サービスの利用状況 ・子育ての不安・悩み ・地域社会の関わり ・子育て支援サービスの利用 ・里親制度の認知状況 ・基本属性 	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚意欲、結婚の見通し ・結婚観、家族観、子ども観 ・理想の子ども数、現実に持てると思う子ども数 ・ライフコースの志向性、定住意識、卒業後の移動 ・他者から紹介された結婚に対する考え方 ・男女の役割分担意識、ライフ・ワーク・バランス ・地域社会との関わり ・家族や子どもに対する感受性 ・妊娠・出産に関わる医学的知見の認知 ・妊娠・出産に関わる不安 ・基本属性
⑨集計方法	岡山県全体の集計は、3県民局の20-49歳人口、同未婚者数、同既婚者数等によるウェイトバック集計(男女別)	岡山県全体の集計は、3県民局の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウェイトバック集計	岡山県全体の集計は、3県民局の公立高校生徒数によるウェイトバック集計(男女別)

結婚、出産、子育てに関する県民意識調査（第一群）の主な集計結果

1. 男女の役割分担意識

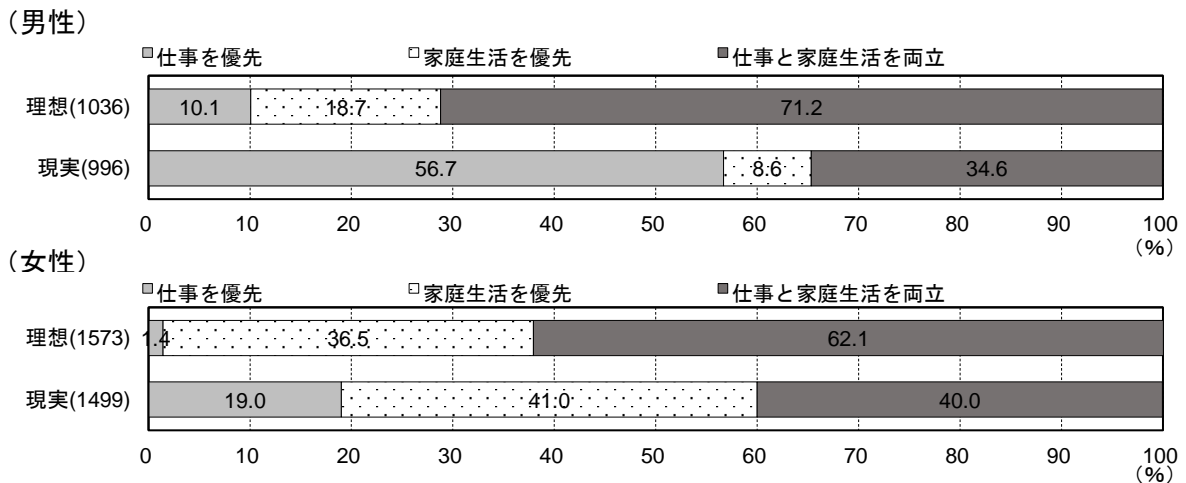
- ・「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という伝統的な役割分担意識を肯定する意見は男女とも 30%～40%に達するものの、性別で大きな差異はみられない（図 1）。
- ・ところが、「結婚生活のための所得に関する自分の役割」を問うと「必要な所得の大半は自分が稼ぐ（相手は働かなくてもよい）」は男性で 36%に達し、「自分は不足分やゆとり分を補う程度でよい」は女性で 40%に上るなど、男女で回答の差が大きい（図 2）。
- ・男女の役割分担意識は「所得に関する自分の役割」に影響を及ぼしているとみられるが、役割分担意識に否定的でも、男性では「自分が稼ぐ」、女性では「補う程度でよい」という者は多い（図 3）。こうした経済面の男女の意識が子育てにも影響している可能性が考えられる。



2. ワーク・ライフ・バランスの理想と現実

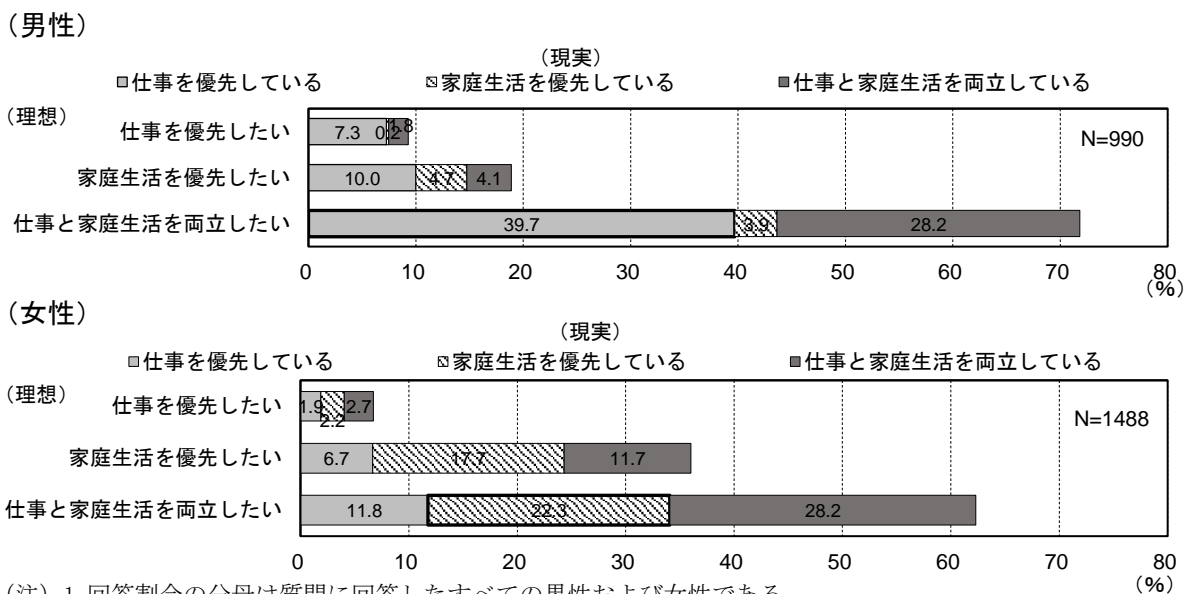
- ・図4に、結婚生活における仕事と家庭の優先度に関する理想と現実について男女別の回答を示した。男性では、「仕事を優先」は理想10%で現実が60%、「仕事と家庭生活を両立」が理想71%で現実35%となっており、女性よりも理想と現実の差が大きくなっている。
- ・図5では理想と現実のギャップを把握するため、理想ごとに現実を集計した。集計は、理想と現実の各組み合わせの全体に対する大きさがわかるよう全回答者に対する割合とした。
- ・理想が実現できていない者の中では、男性は「仕事と家庭生活を両立したい」けれど「仕事を優先している」が最も多い(40%)。女性では、「仕事と家庭生活を両立したい」けれど「家庭生活を優先している」が最も多い(22%)。こうしたギャップを生じさせる要因を探る必要がある。

図4 結婚生活における仕事と家庭生活の優先度に関する理想と現実



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

図5 結婚生活における仕事と家庭生活の優先度に関する理想と現実のギャップ

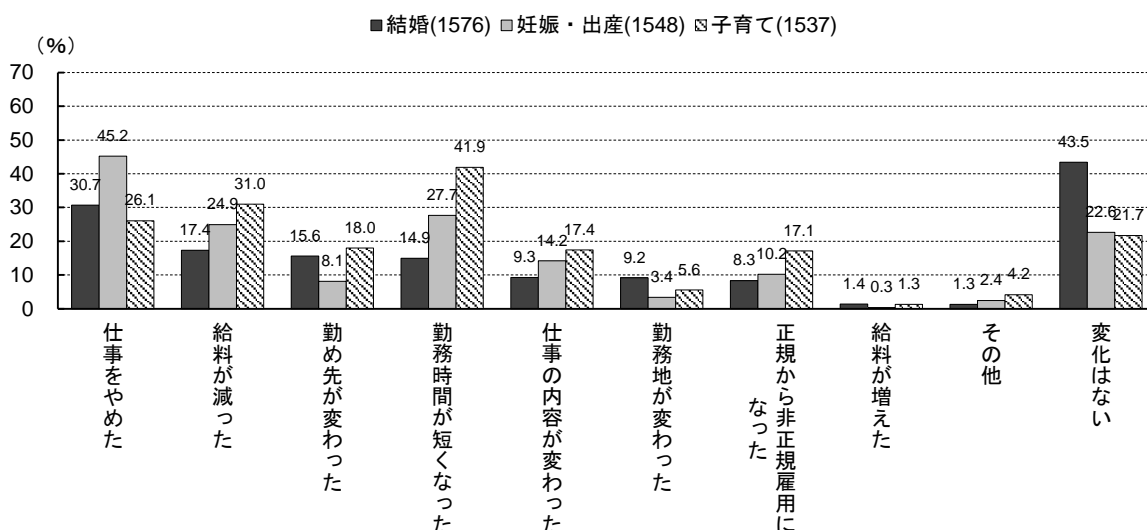


- (注) 1. 回答割合の分母は質問に回答したすべての男性および女性である
 2. 太枠は理想が実現できていない回答のうち割合が最も大きい

3. 結婚、妊娠・出産、子育てによる仕事・働き方の変化

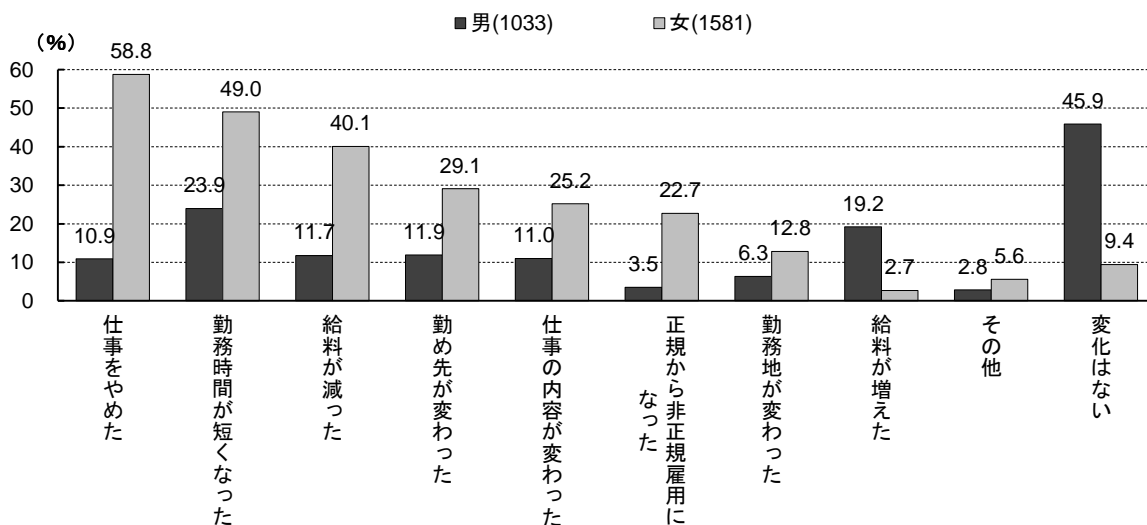
- ・結婚、妊娠・出産、子育てに伴う女性の仕事・働き方の変化は、「仕事をやめた」を除き、子育てが理由にする変化が多い傾向がみられる（図6）。特に、子育てにより「勤務時間が短くなった」は女性の42%であり、これに伴って「給料が減った」が31%に上る。
- ・女性で、結婚、妊娠・出産、子育てのすべてで「変化はない」は9%に過ぎない（図7）。結婚、妊娠・出産、子育てのいずれかにより仕事や働き方の変化があった者のうちでは「仕事をやめた」が60%に上り、男女差も大きい。また、「勤務時間が短くなった」「給料が減った」が40%～50%になっている。

図6 結婚、妊娠・出産、子育てによる仕事や働き方の変化
(女性、予想を含む、複数回答)



(注) 県民局別男女人口（20-49歳）によるウエイトバック集計である

図7 結婚、妊娠・出産、子育てのいずれかによる仕事や働き方の変化
(予想を含む、複数回答)



(注) 1. 県民局別男女人口（20-49歳）によるウエイトバック集計である

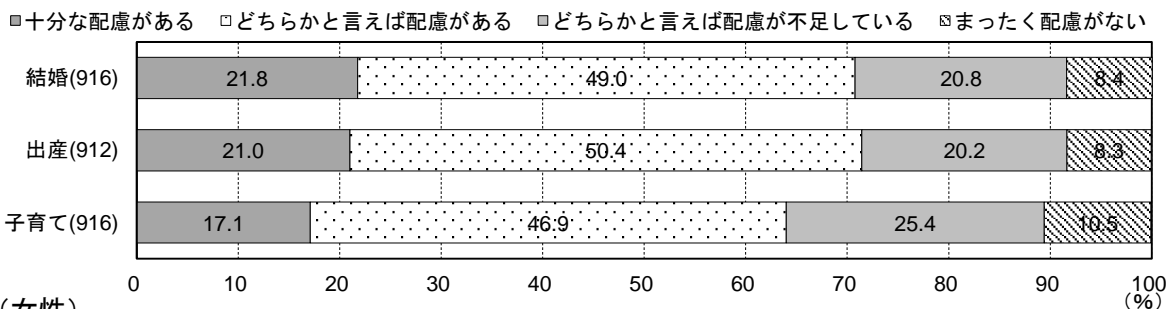
2. 「変化はない」を除く項目は、結婚、妊娠・出産、子育てのいずれかにより仕事や働き方の変化があった者の割合であり、「変化はない」は、結婚、妊娠・出産、子育てのすべてで変化がなかった者の割合

4. 結婚、出産、子育てと仕事の両立に対する職場の配慮

- ・ライフ・ワーク・バランスにおける理想と現実に対しては、要因の一つとして、結婚、出産、子育てと仕事の両立に対する職場の配慮の仕方が関わっていると考えられる。
- ・こうした配慮が職場にあるかどうかを尋ねたところ、女性より男性の方が配慮不足と考える者が多く、結婚、出産、子育ての中では、特に子育てで配慮が不足していると考えられている（図8）。男性では、子育てと仕事の両立に対して「どちらかと言えば配慮が不足している」「まったく配慮がない」とする者は36%に達する。
- ・こうした職場の配慮は、現実を持てると思う子ども数に影響している可能性がある（図9）。男性において、理想よりも現実を持てる子ども数が減るとする者は「十分な配慮がある」職場では30%であるが、「まったく配慮がない」職場では49%に上る。

図8 結婚、出産、子育てと仕事の両立に対する職場の配慮

(男性)



(女性)

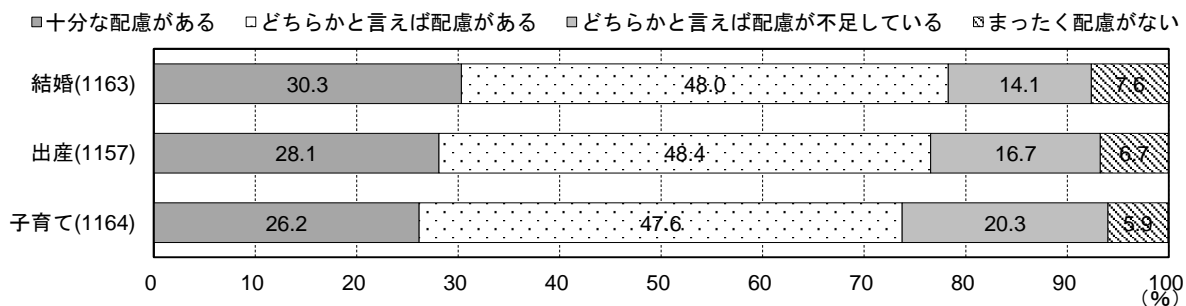
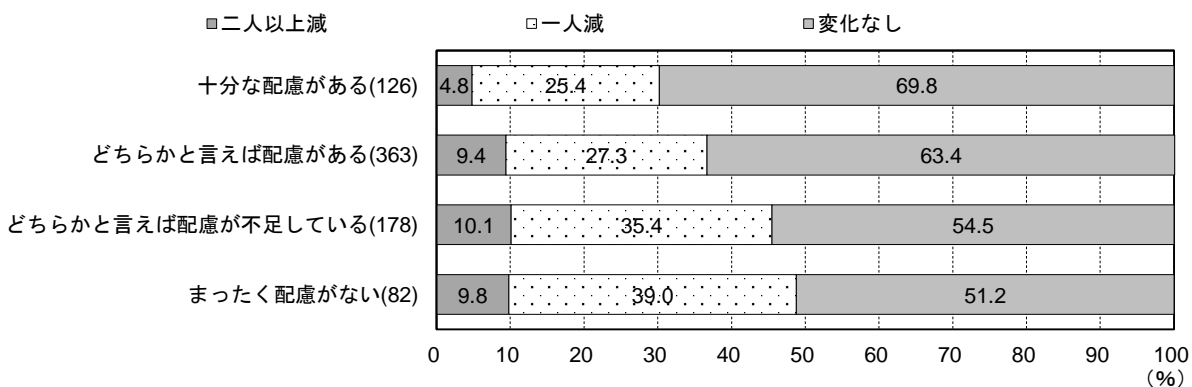


図9 子育てと仕事の両立に対する職場の配慮別にみた理想子ども数と現実を持てる子ども数との差（男性）

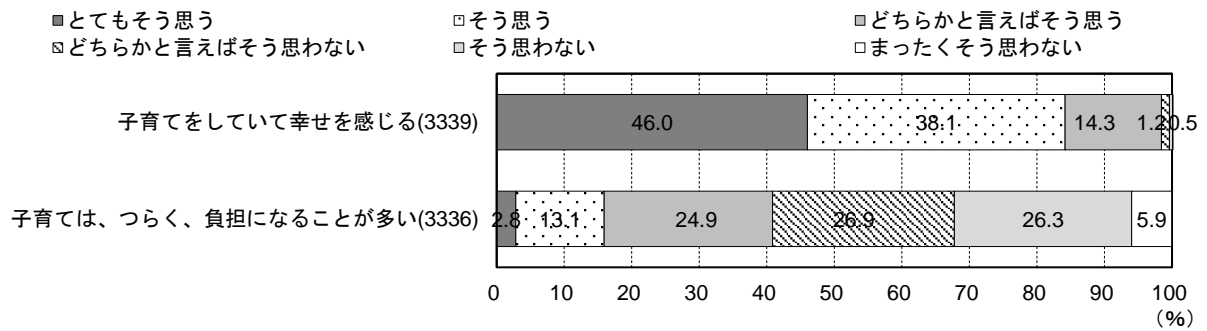


子育て世帯意識調査（第二群）の主な集計結果

1. 子育ての幸福感と負担感

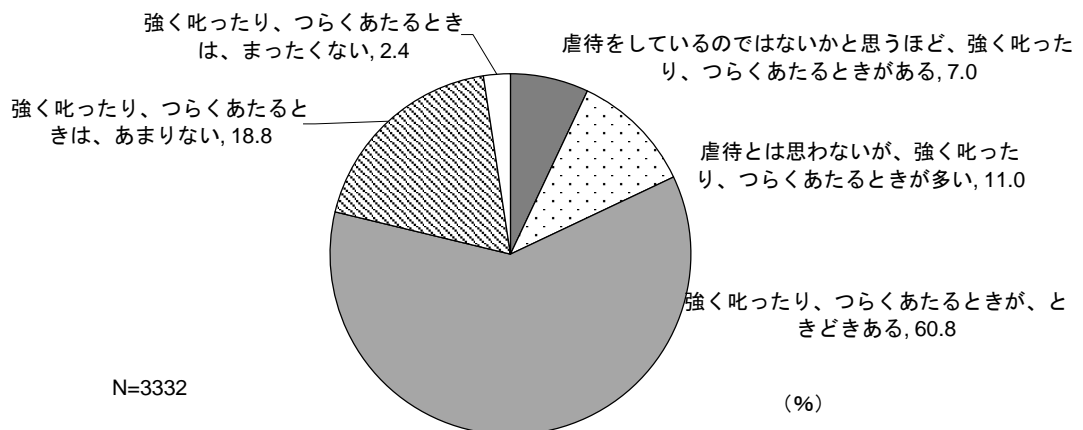
- ・「子育てをされていて幸せを感じる」に対して、「そう思うの計（とてもそう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」は 98%であり、「そう思わないの計（どちらかと言えばそう思わない＋そう思わない＋まったくそう思わない）」は 2%に過ぎない（図 1）。
- ・一方、「子育ては、つらく、負担になることが多い」では、「そう思うの計」は 41%に上る。子育ての幸福感と負担感は表・裏の関係にはなっていないと考えられる。
- ・子どもを強く叱ったり、つらくあたることあるか尋ねたところ、「虐待をしているのではないかとと思うほど、強く叱ったり、つらくあたることある」は 7%であった（図 2）。

図 1 子育ての幸福感と負担感



(注) 1. 県民局別の「最年少の子どもが 9 歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である
 2. 括弧の中の数字はサンプル数（以下、同様）

図 2 子どもを強く叱ったり、つらくあたること



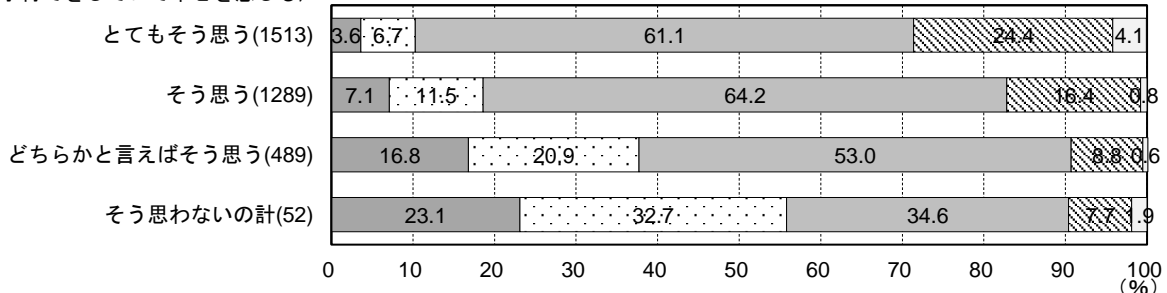
(注) 県民局別の「最年少の子どもが 9 歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である

・子育ての幸福感と負担感の程度は虐待の可能性に影響を与えるほか、幸福感は理想子ども数に結び付いている可能性がある（図3、図4、図5）。子育ての幸福感や負担感がそれぞれどのように形成されているか、要因を探る必要がある。

図3 子育ての幸福感別の子どもを強く叱ったり、つらくあたること

- 虐待をしているのではないかとと思うほど、強く叱ったり、つらくあたる時がある
- 虐待とは思わないが、強く叱ったり、つらくあたる時が多い
- 強く叱ったり、つらくあたる時が、ときどきある
- ▨強く叱ったり、つらくあたる時は、あまりない
- 強く叱ったり、つらくあたる時は、まったくない

(子育てをしていて幸せを感じる)



(注)「そう思わない計」は「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「まったくそう思わない」の合計

図4 子育ての負担感別の子どもを強く叱ったり、つらくあたること

- 虐待をしているのではないかとと思うほど、強く叱ったり、つらくあたる時がある
- 虐待とは思わないが、強く叱ったり、つらくあたる時が多い
- 強く叱ったり、つらくあたる時が、ときどきある
- ▨強く叱ったり、つらくあたる時は、あまりない
- 強く叱ったり、つらくあたる時は、まったくない

(子育てはつらく、負担になることが多い)

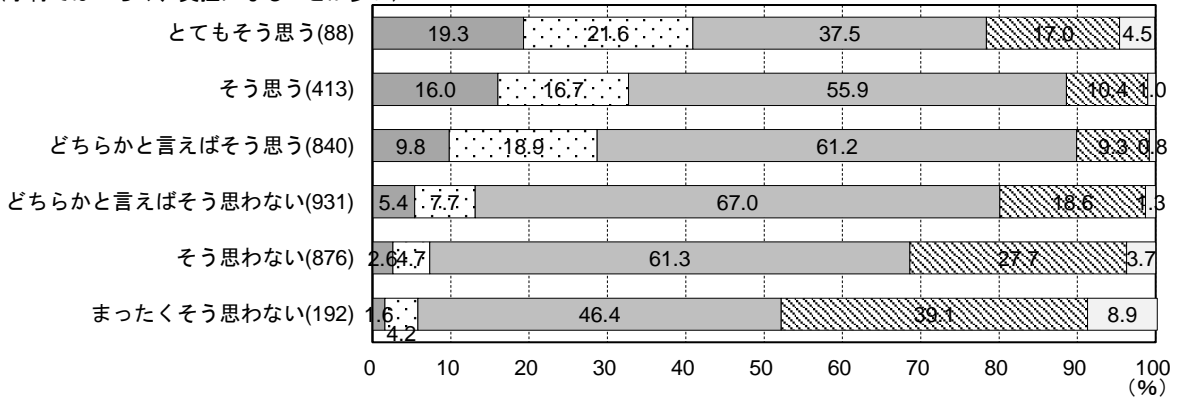
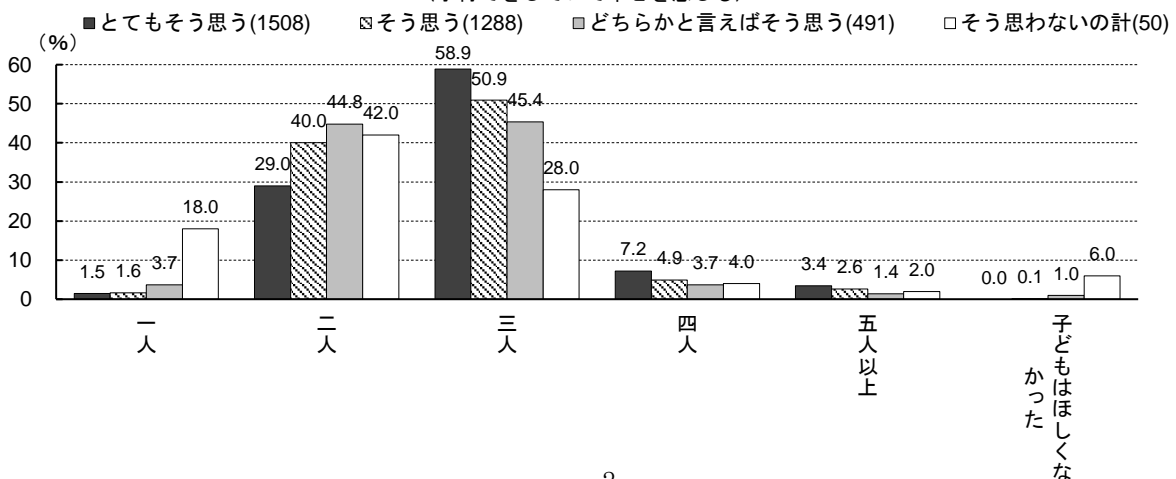


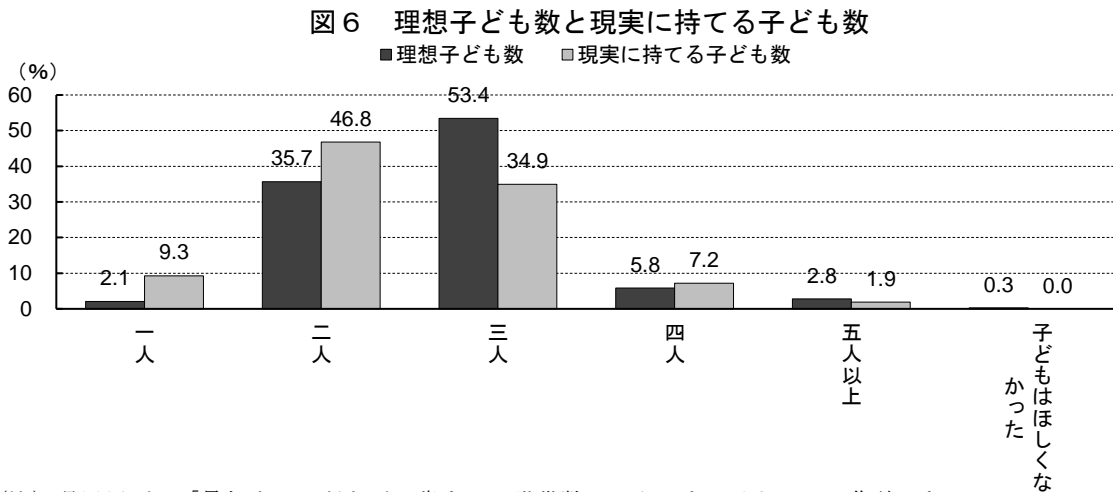
図5 子育ての幸福感別にみた理想の子ども数

(子育てをしていて幸せを感じる)



2. 理想の子ども数と現実持てる子ども数

- ・最も多い理想子供数は「三人」であり 53%となっている（図6）。これに対して、現実持てる子ども数は「三人」が35%に減少し、「二人」が47%に増加する。
- ・理想子ども数と現実持てる子ども数の差を算出すると、理想の子ども数「三人」は「一人減」が45%に達する（図7）。これは現実持てる子ども数が減少するという回答の64%を占める。
- ・子育て世帯の理想子ども数に基づく出生率(2.73)と、現実持てる子ども数に基づく出生率(2.46)の差は、0.27ポイントである（表1）。



(注) 県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウェイトバック集計である

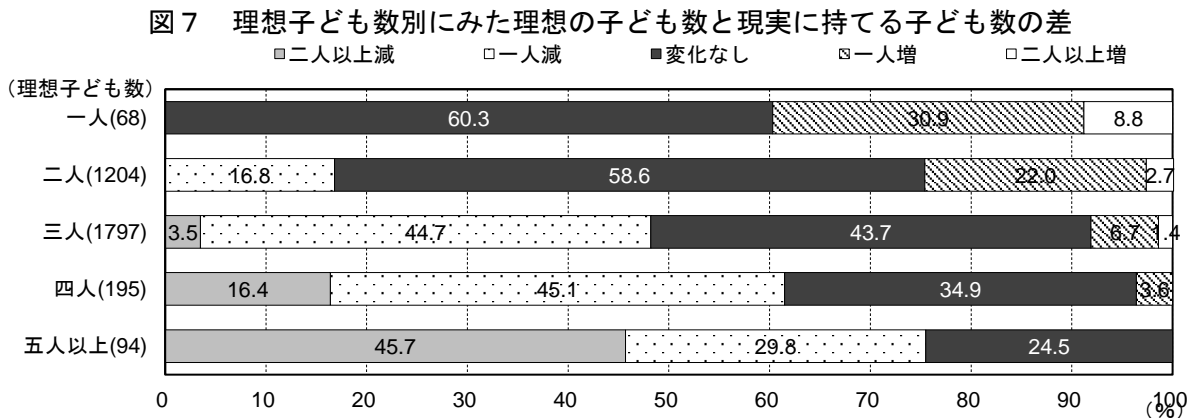


表1 理想子ども数と現実持てる子ども数を元に算出した出生率

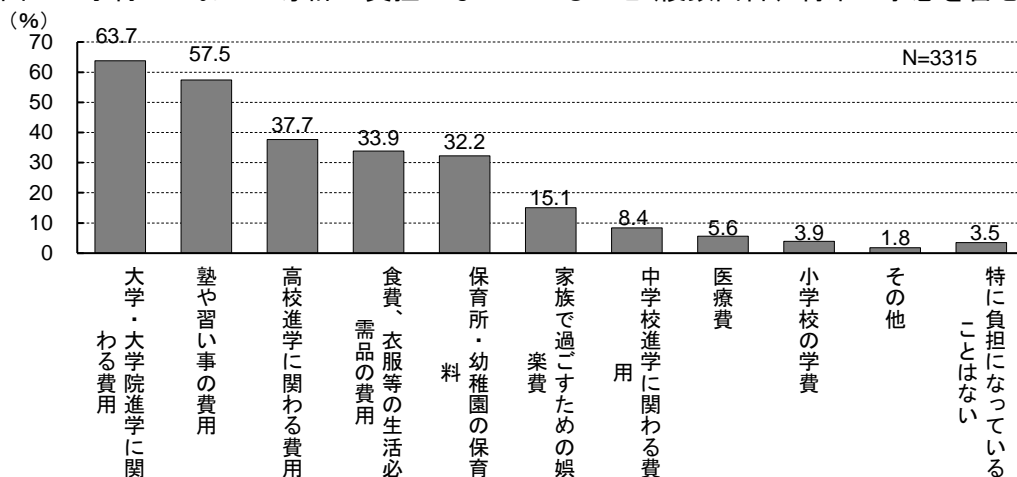
(人)

① 子ども数	②構成比		③出生率 (①×②)	
	理想子ども数	現実持てる子ども数	理想子ども数	現実持てる子ども数
1	0.021	0.093	0.021	0.093
2	0.357	0.468	0.714	0.936
3	0.534	0.349	1.602	1.047
4	0.058	0.072	0.232	0.288
5	0.028	0.019	0.140	0.095
0	0.003	-	0.018	-
合計	1.000	1.000	2.727	2.459

3. 子育ての経済的負担と教育に対する考え方

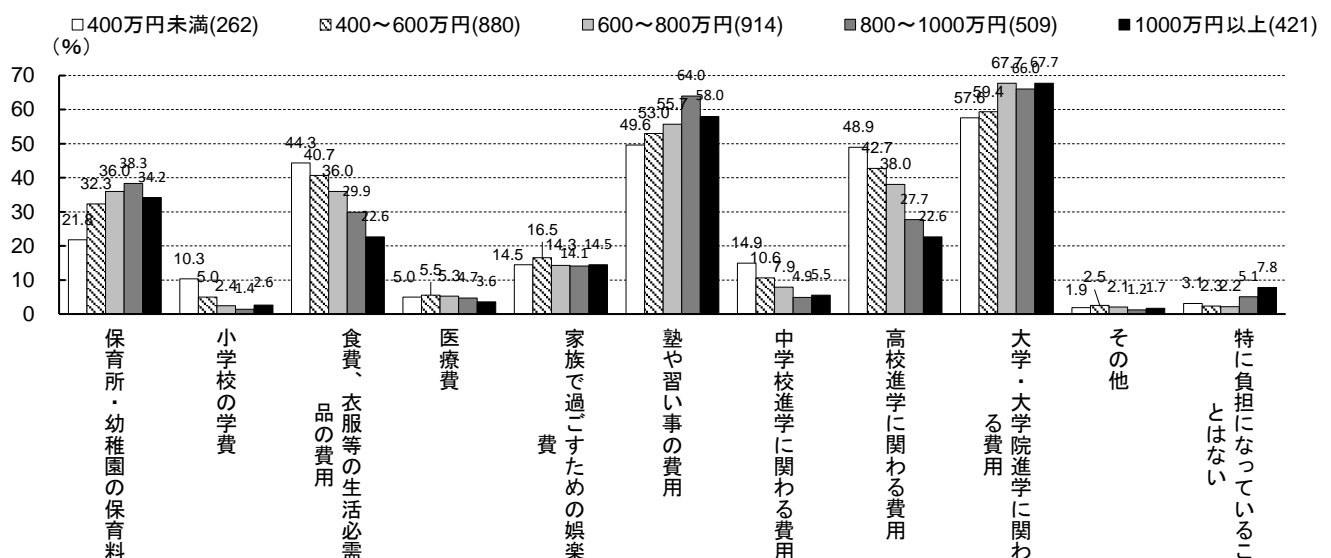
- ・子育てにおいて負担になっていることは、「大学・大学院進学に関わる費用」が64%、「塾や習い事の費用」が58%であり、他の回答に対して20ポイント以上の差が生じている（図8）。
- ・夫婦の所得合計（一人親は本人の所得）で分けて、子育てにおいて家計の負担になっていることをみると、「食費、衣服等の生活必需品の費用」や「高校進学に関わる費用」は所得が少ないほど回答が多い（図9）。ところが、全体で回答が多かった「大学・大学院進学に関わる費用」や「塾や習い事の費用」は所得別でみて大きな差異はみられない。
- ・これは、「大学・大学院進学に関わる費用」が高所得層でも負担になっていることに加えて、低所得層においても子どもを大学・大学院に進学させたいという考えを持っている者が多いことが表れていると考えられる。

図8 子育てにおいて家計の負担になっていること（複数回答、将来の予想を含む）



(注) 県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウェイトバック集計である

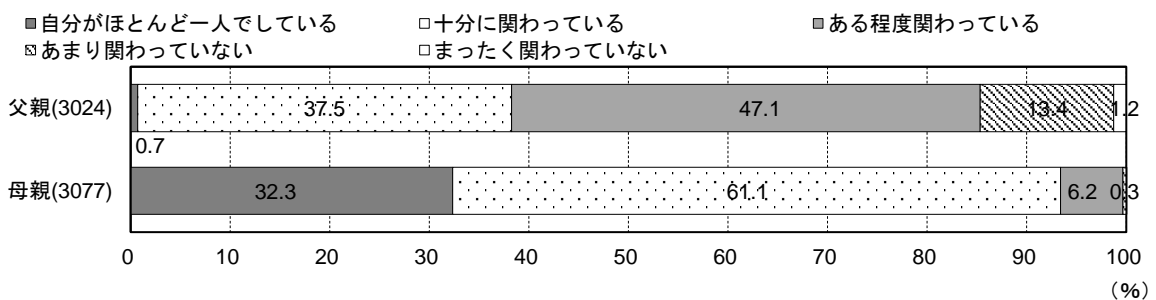
図9 夫婦の所得別にみた子育てにおいて家計の負担になっていること（複数回答、予想を含む）



4. 子育ての関わり方

- ・子育てに対する関わり方は、父親の「十分に関わっている」は38%である。「ある程度関わっている」(47%)の方が多く、「あまり関わっていない」も13%に上る(図10)。一方、母親は「自分がほとんど一人でしている」が33%に上っており、父親と母親の関わり方の差は大きい。
- ・結果、配偶者の子育ての関わり方に対する満足度は、女性では「とても満足している」は14%、「満足している」は24%にとどまる(合計38%)(図11)
- ・こうした配偶者の関わり方に対する満足度は、子育ての負担感に影響を及ぼしていると考えられる(図12)。

図10 子育ての関わり方



(注) 1. 県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウェイトバック集計である
2. 「父親」の93%、母親の7%は配偶者による回答である

図11 配偶者の子育ての関わり方に対する満足度

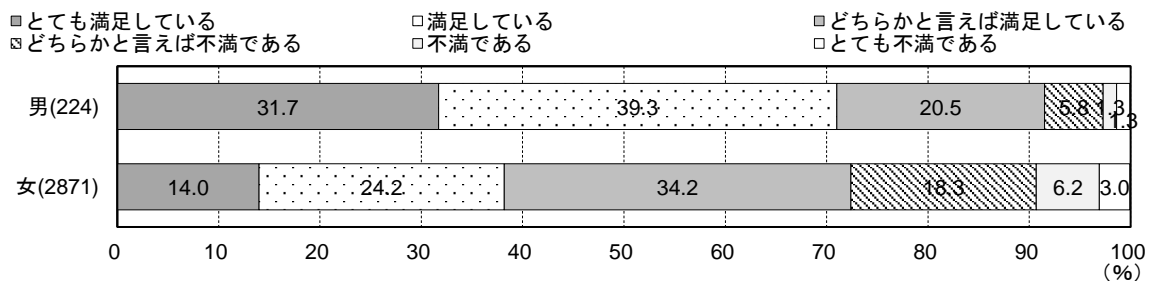
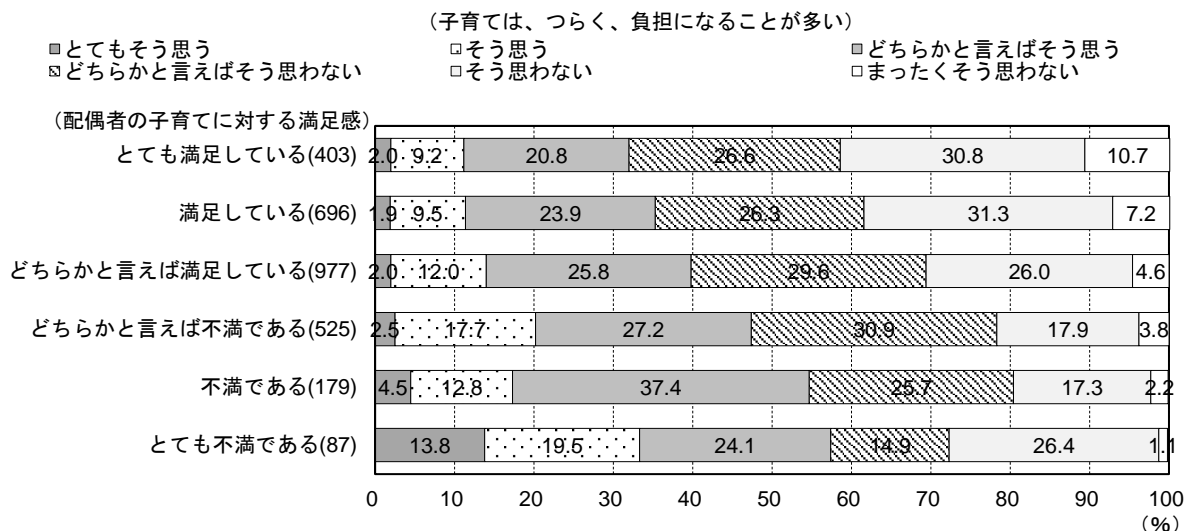


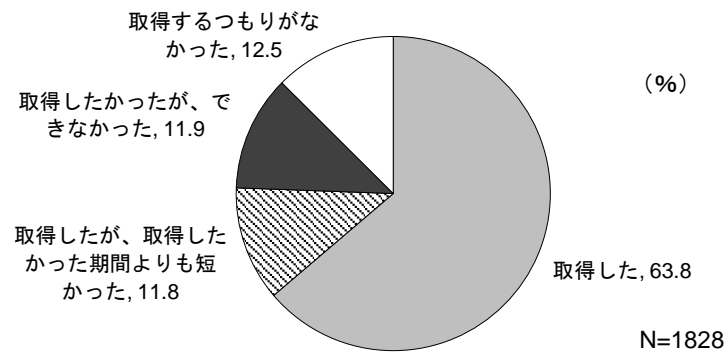
図12 配偶者の子育ての関わり方に対する満足度別にみた子育ての負担感(女性)



5. 育児休業の取得状況

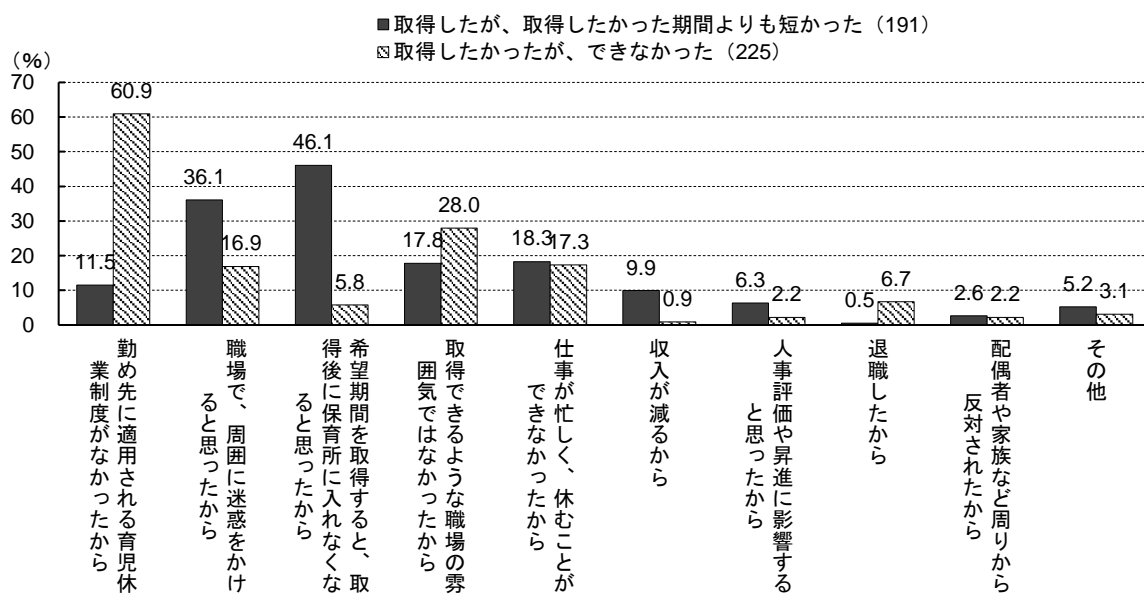
- ・当時就労していた女性を対象に育児休業の所得状況を尋ねると、取得したかった期間通り育児休業を「取得した」者は64%となっている（図13）。一方、「取得したが、取得したかった期間よりも短かった」と「取得したかったが、できなかった」がともに12%になっている。
- ・「取得したかった期間よりも短かった」と「所得できなかった」に分けて理由をみると、「取得したかった期間よりも短かった」理由は、「希望期間を取得すると、取得後に保育所に入れなくなると思ったから」が46%に達する（図14）。次いで、「職場で、周囲に迷惑をかけると思ったから」が36%と多くなっている。
- ・「取得できなかった」理由は、「勤め先に適用される育児休業制度がなかったから」が61%で最も多いが、「仕事が忙しくて、休むことができなかったから」や「取得できるような職場の雰囲気ではなかったから」も20%近い。

図13 育児休業の取得状況（当時就労していた女性）



（注）県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である

図14 育児休業が希望より短かった、あるいは取得できなかった理由（女性、複数回答）

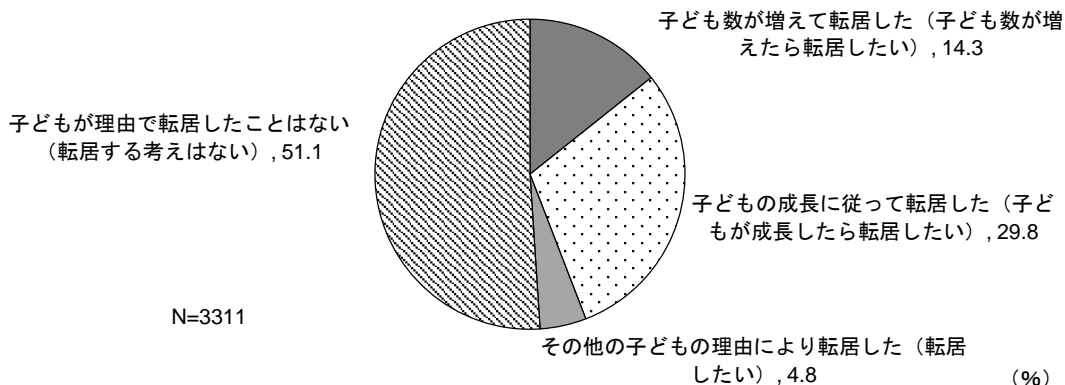


（注）県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である

6. 子育てと住居地選択

- ・子ども数の増加や成長に伴って転居した（転居希望を持つ）世帯は半数に達する（図15、図16）。住宅の購入地、通勤利便性、子育て環境、親との同居・近居等が転居先を選ぶ条件となっており、子育ては市町村にとって定住問題という側面を持っている（図17）。
- ・子育てに伴う移動による県民局外への転出率をみると、備前局14%、備中局16%、美作局9%となっている（図18）。

図15 子ども数の増加や子どもの成長に伴う転居



(注) 県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である

図16 転居した（転居したい）タイミング

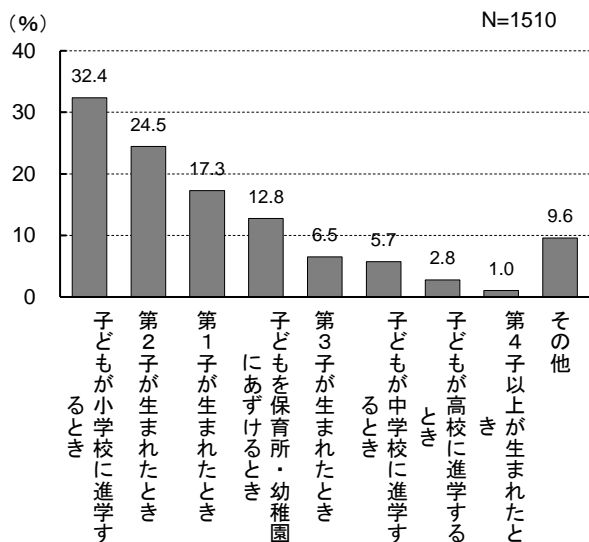
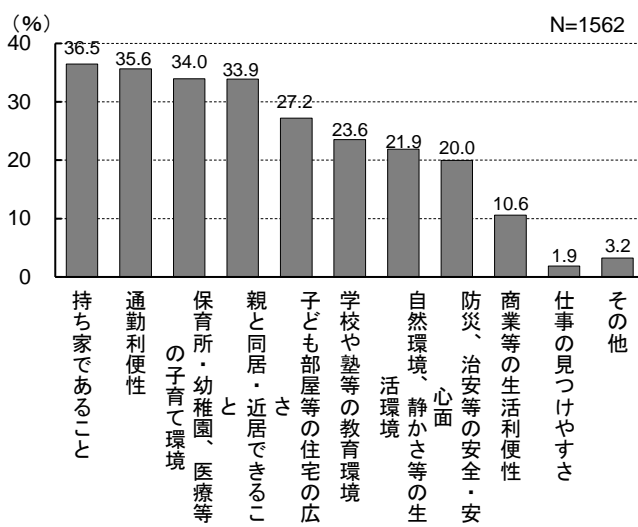
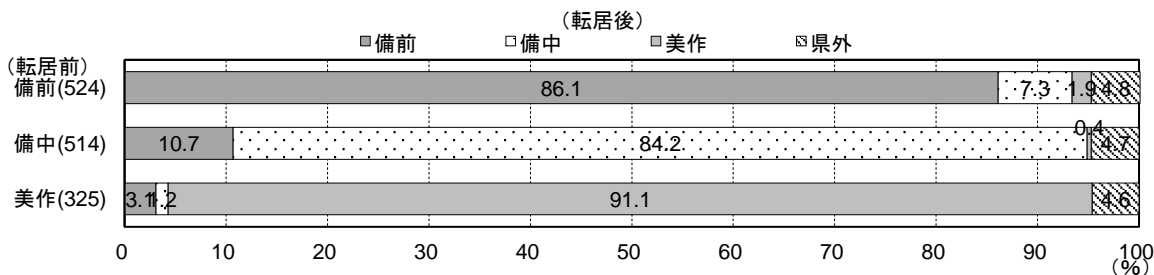


図17 転居先を選ぶ上で重視すること



(注) 1. 県民局別の「最年少の子どもが9歳までの世帯数」によるウエイトバック集計である
2. 複数回答である

図18 県民局別にみた子育てに伴う転居先

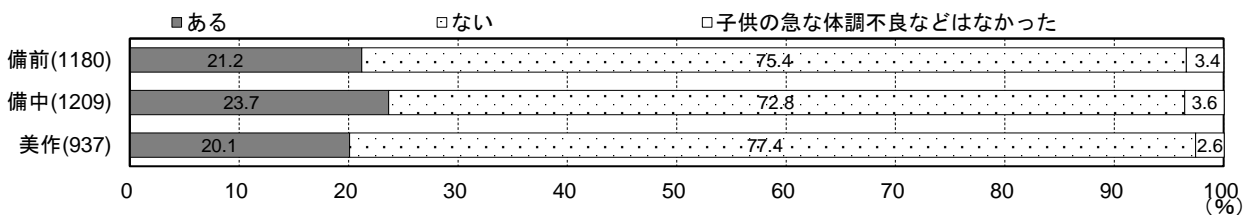


7. 子育てに関わる保健・医療サービスの利用状況とあずかりサービスのニーズ

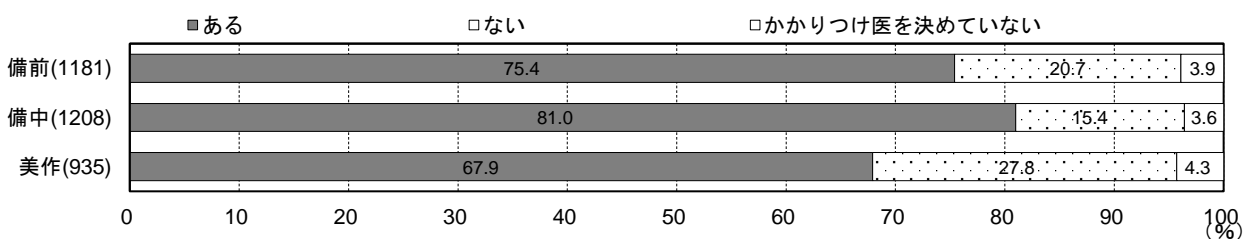
- ・子育てに関わる保健・医療の利用について県民局間の差異に着目すると、「子どもの体調が悪いときに診療してくれる小児科が見つからず困った経験」は、ほとんど差はない(図19)。しかし、かかりつけ医や専門的治療を行う医療機関の利用では美作局と他局の間で差がみられる。
- ・あずかりサービスのニーズを県民局で比較すると、「小学校低学年のあずかり」「あずかってくれる時間の延長」「年度途中の入所」は備前局が多いなどニーズの多様さに違いがある(図20)。

図19 子育てに関わる保健・医療サービスで困ったこと、不便に思ったこと等

■子供の体調が悪いときに診療してくれる小児科が見つからず困った経験



■10分程度で行くことができる近くに、信頼している子供のかかりつけ医



■専門的治療が必要な疾病で子どもを診療してくれる医療機関が近くになく、不便に思ったこと

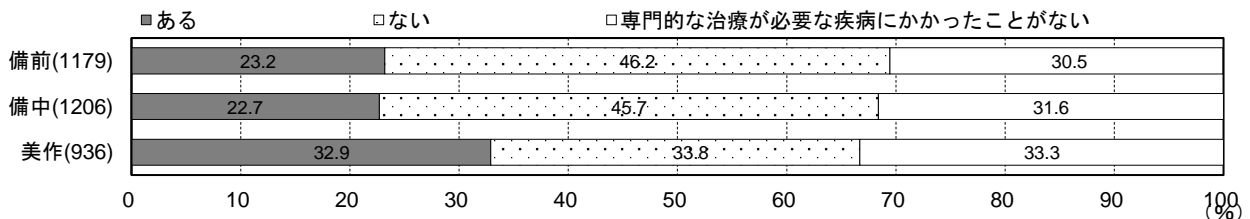
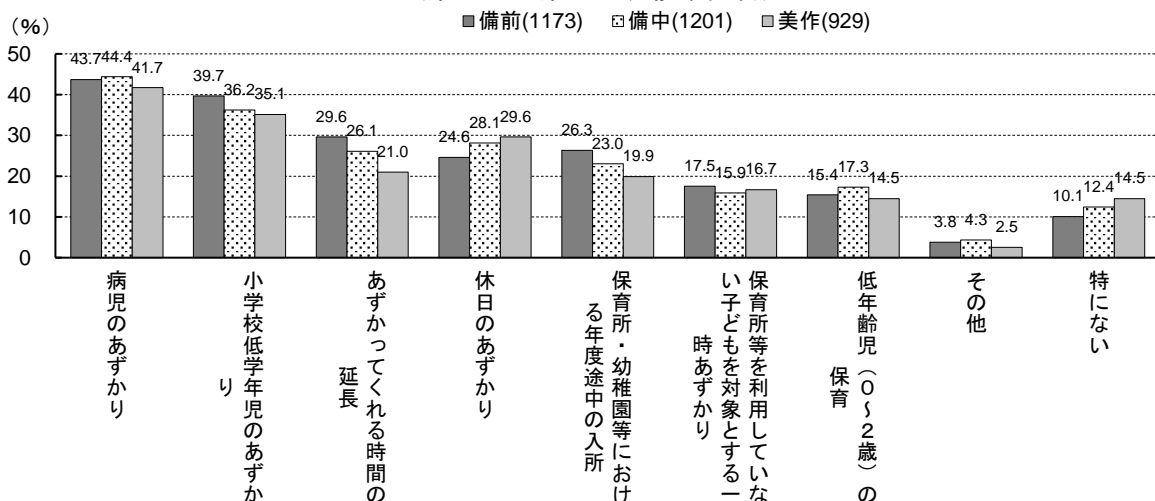


図20 県民局別でみた仕事を続けるため充実してほしい子どものあずかりサービス(第1子~第3子、複数回答)



8. 公的な子育て支援サービスの利用状況と利用意向

(利用状況)

- ・子育て支援サービス等の利用経験をみると「ももっこカード」を「利用したことがある」が73%に達し、利用率が最も高い(図2-1)。また、「児童館」と「地域子育て支援センター」が、50%~60%の利用率になっている。
- ・利用率が低いサービスの中には、「ファミリーサポートセンター」や「家事等を代行する公的サービス」のように「知らない」という回答が多く、認知率が低いサービスもある。

(利用意向)

- ・利用意向は、「ももっこカード」の「是非、利用したい(利用すればよかった)」が69%に上る。次いで、児童館が53%で利用ニーズが大きい(図2-3)。
- ・「公的機関が行う電話相談」や「児童相談所」のように、「是非、利用したい」と「支援内容をよく知りたい」を合わせても、利用ニーズが50%程度のサービスもある。

図2-1 子育て支援サービス等の利用経験

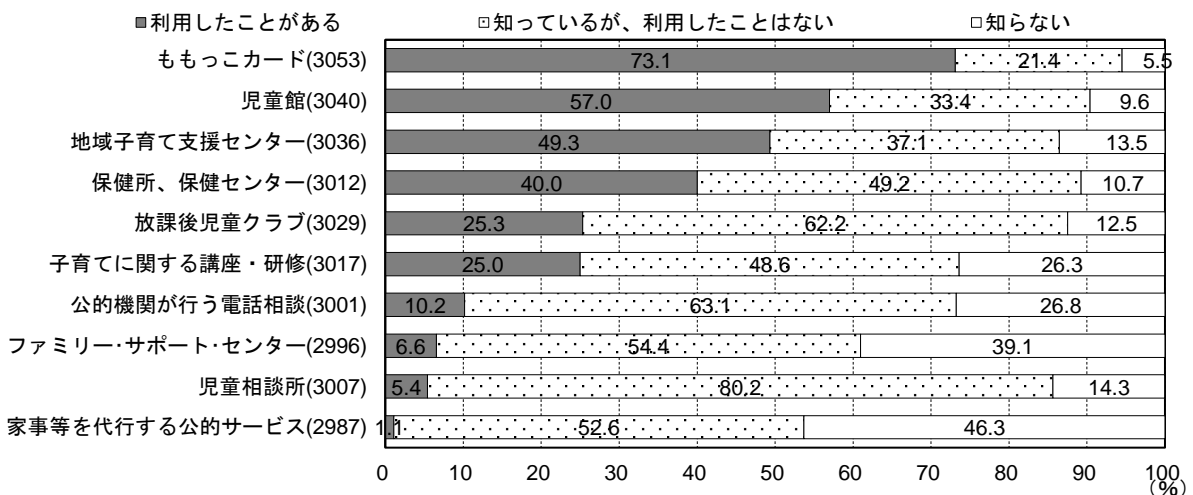
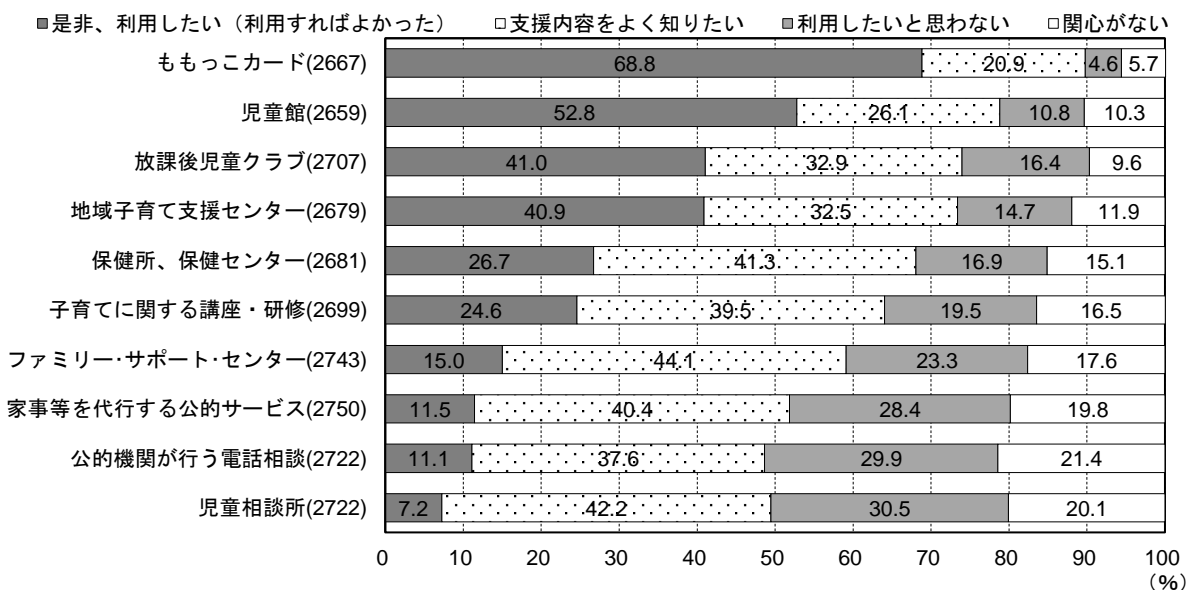
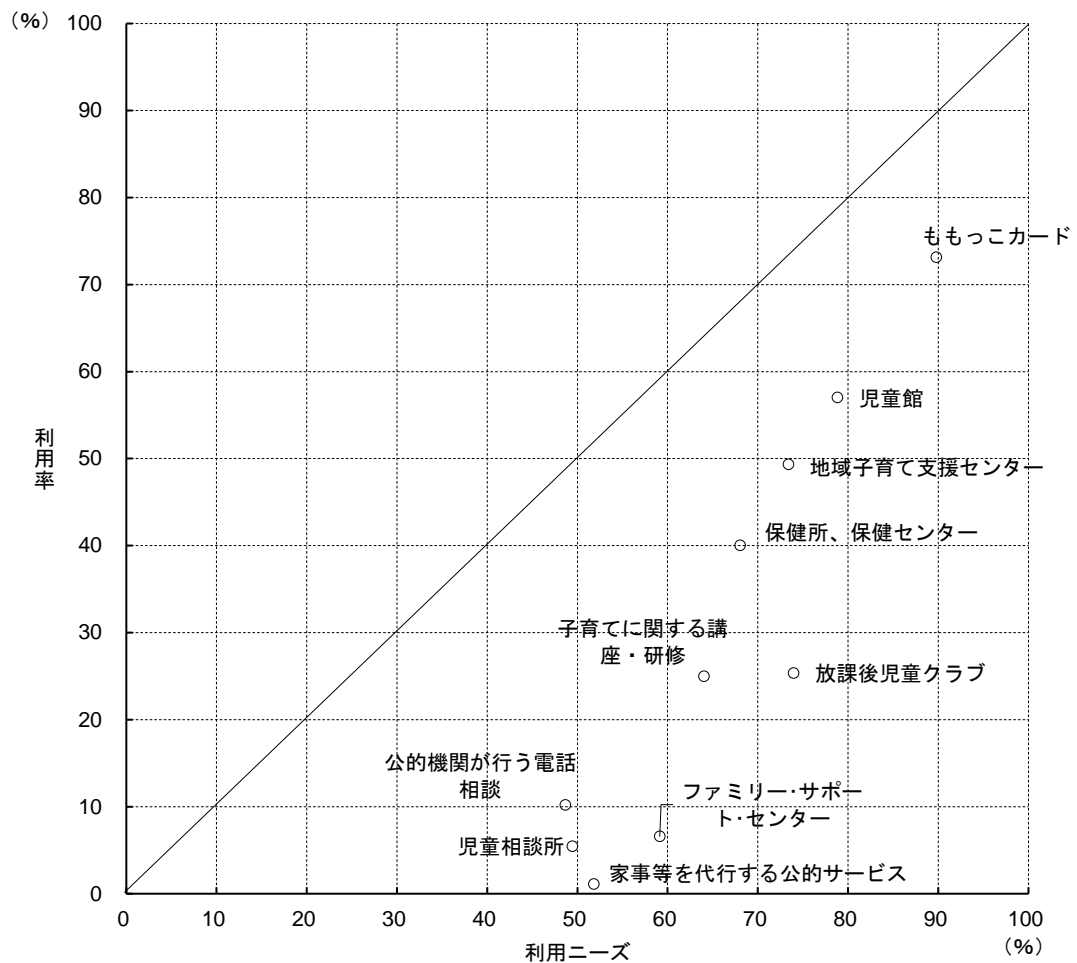


図2-2 子育て支援サービス等の利用意向



- ・横軸に公的支援サービスの利用ニーズ、縦軸に利用率をとって図を描くと、利用率の要因を「利用ニーズの大きさ」と「ニーズと利用の乖離」の二つに分けることができる（図23）。右上がりの45度線と点の縦方向の差が「ニーズと利用の乖離」を示す。
- ・「ももっこカード」はニーズが大きく、かつ実際に利用されているため、利用率が高くなっている。
- ・一方、「ファミリーサポートセンター」や「児童相談所」は利用ニーズが50%～60%と低くなっている面があるものの、利用率が低迷している理由は周知不足等による「ニーズと利用の乖離」の影響も大きい。

図23 公的支援サービスに対するニーズと利用状況



(注) 利用ニーズ：「是非、利用したい」＋「支援内容がよく知りたい」
 利用率：「利用したことがある」

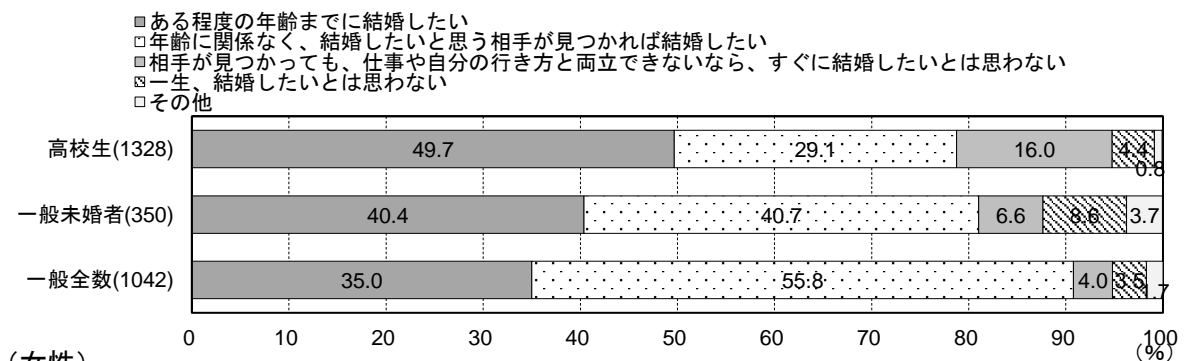
結婚、出産、子育てに関する高校生意識調査（第三群）の主な集計結果

1. 結婚意欲

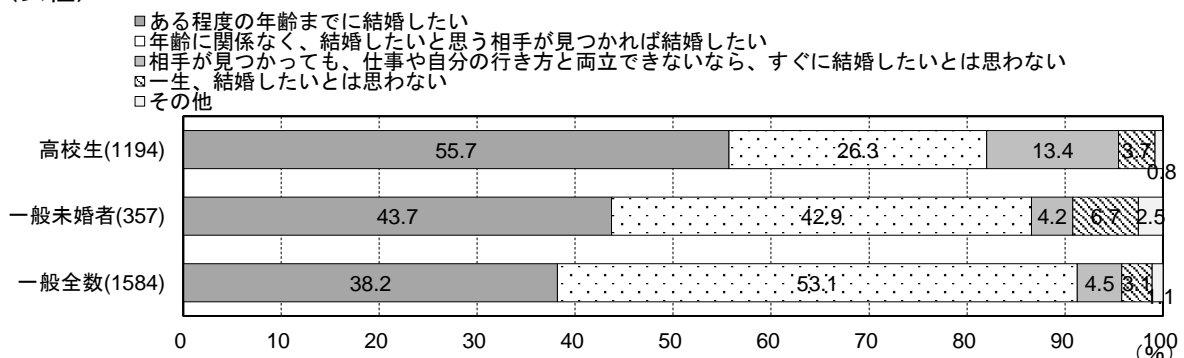
- ・ 高校生の結婚についての考え方は、「ある程度の年齢までに結婚したい」という「年齢志向」が男子 50%、女子 56%であり、男女とも一般未婚者と一般調査の全数集計を上回る（図 1）。
- ・ 一般調査とは選択肢の表現がやや異なるものの、「相手が見つかったら、仕事や自分の生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいと思わない」が男子 16%、女子 13%であり、一般未婚者と一般全数の 3 倍以上になっている。
- ・ これらの結果、「年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい」という「相手志向」と、「一生、結婚したいとは思わない」という「生涯非婚」が、一般未婚者と一般全数集計に対して少なくなっている。
- ・ 結婚の考え方に関する高校生の特徴として、20-49 歳を対象とした一般調査に比較し、結婚意欲の強い者（年齢志向者）と、ライフコースの実現志向が強く、結婚と比較衡量する者の両方が多くなっている。

図 1 結婚についての考え（一般未婚者および一般全数集計との比較）

(男性)



(女性)



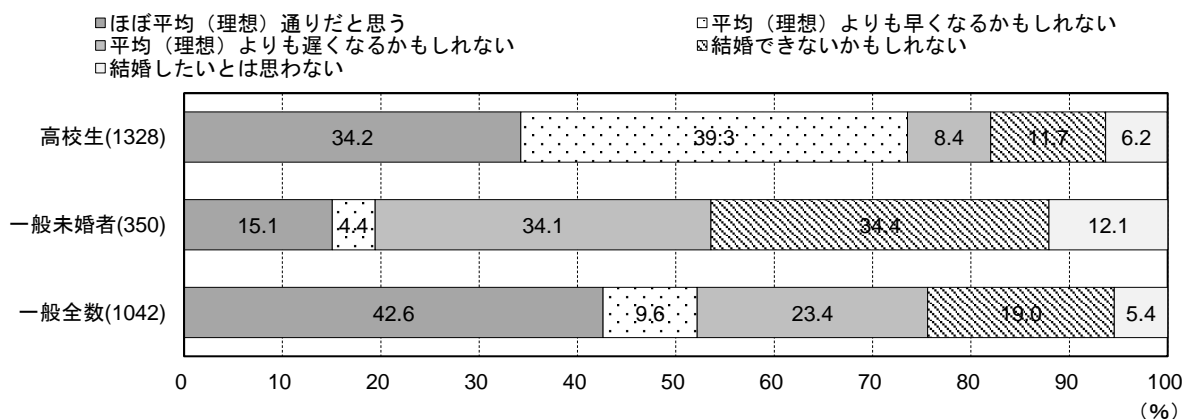
- (注) 1. それぞれ、県民局別の県立高校生数（二年生・三年生）、20-49 歳未婚者人口、20-49 歳人口によるウエイトバック集計である
2. 「相手が見つかったら、仕事や自分の生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいと思わない」は、一般調査では「相手が見つかったら、自分結婚するつもりはない（なかった）」と表現されている

2. 結婚の見通し

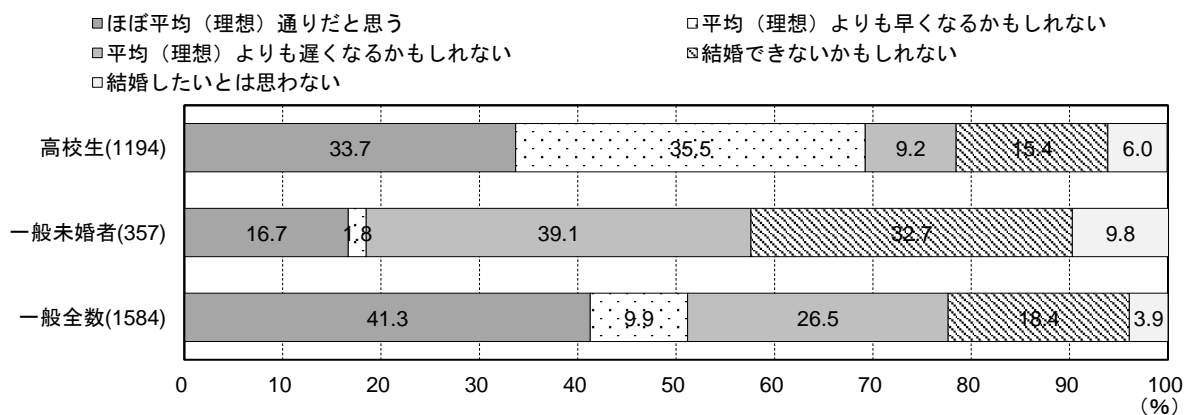
- ・ 高校生の結婚見通しは、平均初婚年齢（2017年は夫31.1歳、妻29.4歳）に対して男子は「ほぼ平均通り」が34%、「平均よりも早くなる」が39%であった（図2）。女子は、「ほぼ平均通り」が34%、「平均よりも早くなる」が36%となっている。
- ・ この結果、高校生では、一般調査、特に一般未婚者と違って「結婚できないかもしれない」が少ない（男子12%、女子15%）。また、「平均」と「理想」の違いのため単純な比較はできないものの、「遅くなる」も一般調査に比べて大幅に小さい（男子8%、女子9%）。
- ・ 高校生の結婚意欲は「年齢志向」が多く、一般調査より結婚意欲が強く表れる。一方、一般調査では、現実の結婚見通しが結婚意欲に影響を及ぼしており、高校生の結婚意欲が高い理由の一つは、高校時点では「結婚できない」「結婚が遅くなる」と思っている者が少ないためと考えられる。
- ・ 高校卒業後の出会いや就職後の所得・労働状況等により、結婚見通しに変化が生じ、これが影響を与えて結婚意欲が低下すると予想される。

図2 結婚の見通し

(男性)



(女性)

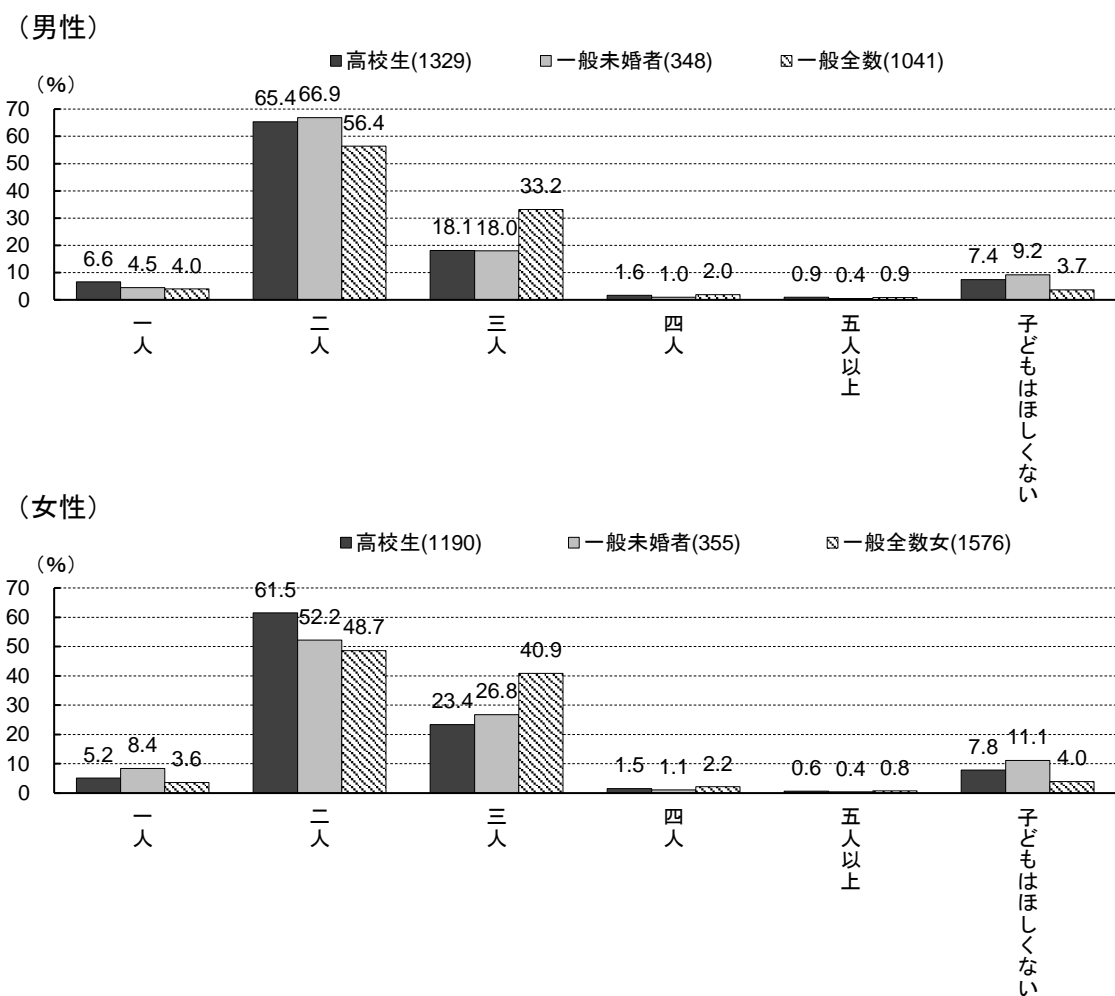


- (注) 1. それぞれ、県民局別の県立高校生数（二年生・三年生）、20-49歳未婚者人口、20-49歳人口によるウエイトバック集計である
 2. 「平均」は高校生調査、「理想」は一般調査の選択肢の表現である
 3. 一般調査の既婚者の選択肢は「ほぼ理想通りだった」など過去形である

3. 理想の子ども数

- ・子どもを持つ意欲を表わす指標として高校生の理想子ども数を把握すると、男子は「二人」が65%、「三人」が18%である。女子は「二人」が62%、「三人」が23%である（図3）。
- ・男子の回答は、一般未婚者とほぼ同じであり、一般全数集計に対して「三人」が大きく減少している。女子も、一般全数集計に対して「三人」が減る点は一般未婚者と同様であるものの、男子と異なり、一般未婚者よりもさらに「三人」が少なくなっている。
- ・一般全数と比較して、高校生の理想子ども数が少なくなっている理由が、世代効果*によるものかどうかを把握することが重要と考えられる。

図3 理想の子ども数



(注) それぞれ、県民局別の県立高校生数（二年生・三年生）、20-49歳未婚者人口、20-49歳人口によるウェイトバック集計である

※世代効果

年齢階層間の価値観や行動の比較結果は、年齢効果、世代効果、時代効果に分けることができる。

年齢効果：どの世代でも年齢の上昇やライフイベントの経過に伴い表れる変化

世代効果：年齢の上昇やライフイベントの経過とは関係ない世代間固有の差異

時代効果：すべての年齢・世代に共通する調査時点が異なることによる差異であり、指標間の時点比較で注意が必要となる

(高校生の希望出生率の算出)

- ・結婚希望と理想子ども数を元に高校生の希望出生率を算出すると、男子 2.02、女子 2.04 となった(表1)。
- ・大学進学や就職を経験してなく、進学・就職に伴う人口移動前の高校生は、結婚や子どもを持つことに関して岡山県民の「原初状態」を捉えていると考えられる。
- ・そうした高校生がすべて県内に定住し、その結婚希望と理想子ども数を実現しても、人口置換水準(2.07)に達しない。

表1 結婚希望と理想子ども数を元に算出した希望出生率(高校生)

(男性)

理想子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想 子ども数	ある程度の年齢までに結婚したい	0.05	0.68	0.24	0.02	0.00	0.02	1.00
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.07	0.67	0.19	0.01	0.02	0.03	1.00
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.11	0.63	0.12	0.01	0.00	0.13	1.00
	一生、結婚したいとは思わない	0.05	0.16	0.04	0.02	0.02	0.71	1.00
	その他	0.08	0.42	0.08	0.00	0.25	0.17	1.00
② 理想子ども 数×①	ある程度の年齢までに結婚したい	0.05	1.36	0.71	0.07	0.02	0.00	2.20
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.07	1.35	0.57	0.04	0.10	0.00	2.13
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.11	1.27	0.36	0.02	0.00	0.00	1.76
	一生、結婚したいとは思わない	0	0	0	0	0	0	0.00
	その他	0.08	0.83	0.25	0.00	1.25	0.00	2.42
③ 構成比	ある程度の年齢までに結婚したい	0.49	④=②×③					1.08
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.29						0.63
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.16						0.28
	一生、結婚したいとは思わない	0.04						0.00
	その他	0.01						0.02
理想ベースの希望出生率(④の合計)								2.02

(女性)

理想子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想 子ども数	ある程度の年齢までに結婚したい	0.04	0.65	0.27	0.02	0.00	0.02	1.00
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.07	0.62	0.24	0.02	0.01	0.05	1.00
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.09	0.55	0.15	0.00	0.00	0.22	1.00
	一生、結婚したいとは思わない	0.05	0.19	0.02	0.00	0.05	0.70	1.00
	その他	0.00	0.60	0.10	0.00	0.00	0.30	1.00
② 理想子ども 数×①	ある程度の年齢までに結婚したい	0.04	1.31	0.82	0.07	0.02	0.00	2.25
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.07	1.23	0.71	0.08	0.05	0.00	2.13
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.09	1.09	0.46	0.00	0.00	0.00	1.63
	一生、結婚したいとは思わない	0	0	0	0	0	0	0.00
	その他	0.00	1.20	0.30	0.00	0.00	0.00	1.50
③ 構成比	ある程度の年齢までに結婚したい	0.55	④=②×③					1.24
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.27						0.57
	仕事や生き方と両立できないなら、すぐに結婚したいとは思わない	0.14						0.23
	一生、結婚したいとは思わない	0.04						0.00
	その他	0.01						0.01
理想ベースの希望出生率(④の合計)								2.04

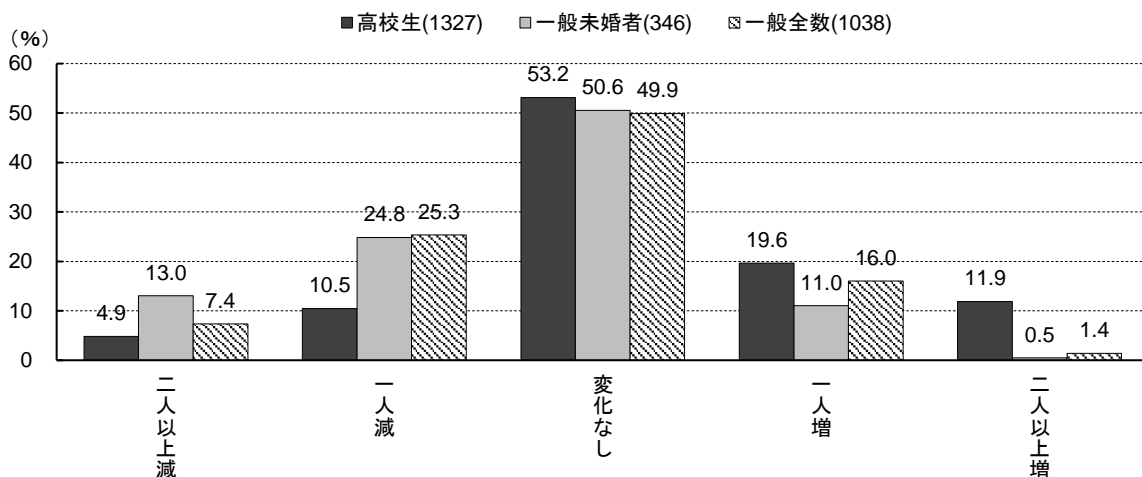
(注) 生涯非婚は、理想子ども数の回答があっても希望出生率への寄与はゼロとした

4. 現実に持てる子供数（理想数との差）

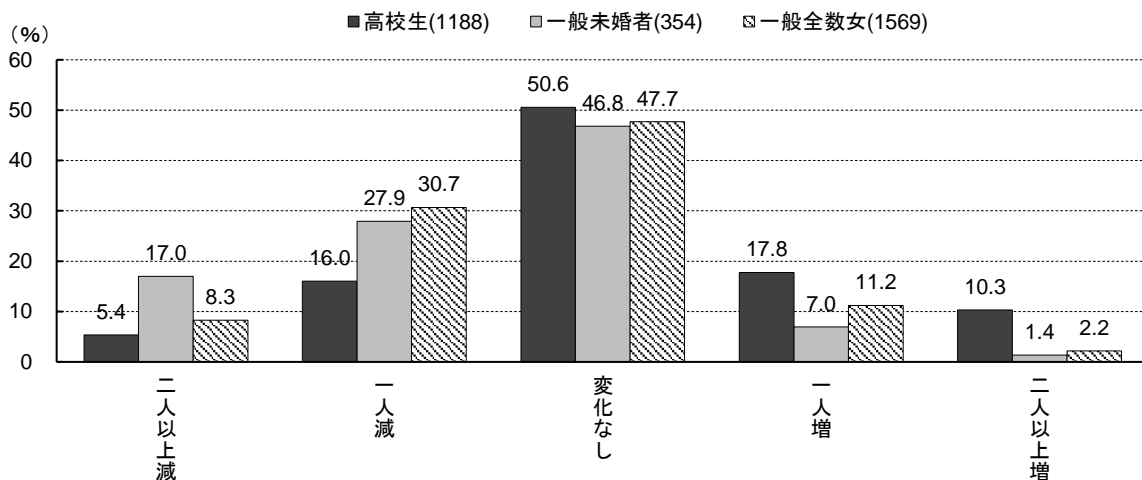
- ・理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差を算出すると、高校生では、「一人減」が男子 11%、女子 16%、「二人以上減」が男子 5%、女性 6%となっている（図 4）。
- ・ところが、高校生では「一人増」が男子 19%、女子 17%、「二人以上増」が男子 11%、女子 10%に達している。このため、子ども数の理想と現実の差は「減少」より「増加」の方が多く、高校生の大きな特徴になっている。一般調査では、理想と現実の差は「増加」より「減少」の方が多い。
- ・理想より現実が「増加」と予想している高校生は、「ほしいと思う以上に子どもを持つことになる」と考えていると解釈することができ、一般に対する高校生の子どもを持つ意欲の低さや高校生が社会的なプレッシャーを受けていることなどを示している可能性がある。
- ・理想数より現実数が多くなるとする高校生は、男子 32%、女子 28%に上る。

図 4 理想子ども数と現実に持てる子ども数との差

(男性)



(女性)



(注) それぞれ、県民局別の県立高校生数（二年生・三年生）、20-49 歳未婚者人口、20-49 歳人口によるウェイトバック集計である